

KL5C80A12ハードウェア説明書

(有)中日電工

[目次]

1. パラレルポートA	1
1.1 P00~P07の入出力方向設定	1
1.2 P10~P17の入出力方向設定	1
2. パラレルポートB	2
2.1 P20~P47の入出力方向設定	2
2.2 ビット出力制御	2
3. タイマ/カウンタA	3
3.1 入出力端子	3
3.2 動作モード	3
3.2.1 分周モード	3
3.2.2 パルス幅変調(PWM)モード	4
3.2.3 パルスモード	4
3.2.4 パルス幅/周期測定モード	4
3.3 リセット時の動作	4
3.4 モード設定	4
3.5 コマンド	5
3.5.1 カウンタラッチコマンド	5
3.5.2 リードライトシーケンスクリアコマンド	6
3.5.3 フラグクリアコマンド	6
3.6 カウンタへのカウンタ初期値の設定	6
3.7 カウンタの読み出し	6
3.8 ステータスの読み出し	6
4. タイマ/カウンタB	7
4.1 入出力端子	7
4.2 動作モード	7
4.2.1 連続カウントモード	7
4.2.2 単発カウントモード	8
4.2.3 パルス幅変調(PWM)モード	8
4.2.4 ウォッチドッグタイマ(WDT)モード	8
4.3 OUTP出力とOUTS出力	8
4.4 リセット時の動作	8
4.5 モード設定	8
4.6 カウンタへのカウンタ初期値の設定	9
4.7 カウンタの読み出し	9
4.8 ステータスの読み出し	9
5. シリアルインターフェース	9
6. 割り込みコントローラ	10
6.1 割り込み番号	10
6.2 割り込みコントローラのレジスタとI/Oアドレス	10
6.2.1 LER(Level/Edge Register) 書き込み専用(読み出し不可)	10
6.2.2 PGR(Priority Group Register) 書き込み専用(読み出し不可)	11
6.2.3 IMR(Interrupt Mask Register) 書き込み読み出し可	11
6.2.4 IVR(Interrupt Vector Register) 書き込み専用(読み出し不可)	11
6.2.5 ISR(In Service Register)読み出し専用(書き込み不可)	11
6.3 割り込みベクタの出力	12
6.4 レジスタ設定シーケンス	12
6.5 割り込み要求の受付	12
6.6 リセット時の動作	13
7. MMU(メモリマネジメントユニット)	14
8. 動作モードの設定	17
9. 命令実行時間	18
10. KL5C8012内部回路のI/Oアドレス	18

KL5C8012は川崎製鉄がZ80A互換CPUをコアにして、パラレルI/O、シリアルI/O、プログラマブルカウンタ、MMU、割込みコントローラを加えて1個のLSIにまとめたものです。CPU部分はZ80Aと同じ働きをするので、Z80Aのために書かれたプログラムをそのまま実行することができます。

CPUクロックは10MHzですが独自のアーキテクチャにより高速に命令を実行するため、Z80Aの40MHzに相当するといわれています。しかしKL5C8012の本来の実行クロックではメモリのアクセスが余りに高速になるため、特にROMアクセスがきびしくなります。そこでKL5C80A12版ND80KL/86では、メモリアクセス時に1クロックウェイトをかけています(I/Oアクセスにも1クロックウェイトを挿入します)。それでもZ80Aの18~20MHzに相当する速度が得られます。ND80Z3.5のクロックが6MHzであることからみても、そのスピードが驚異的であることが理解できると思います。

KL5C8012は内蔵しているパラレルI/Oだけでも8ビット×5ポート=40ビットもあり、これも驚異的といえます。ポートは3ポートが82C55、2ポートがZ80PIO相当の機能でありこれもユーザーにとってなかなか得がたい機能といえます。パラレルI/OとIC端子を共用しているとはいえ、このほかになんと16ビットのタイマー/カウンタが5チャンネルと1チャンネルのUSART(シリアルインターフェース)まで備えています。USARTは8251に比べてコントロールがはるかに容易で、もちろんZ80SIOよりはずっと使いやすくできています。

さらに16レベルの割り込みコントローラと最大512KBのメモリ空間をアクセスできるMMU(メモリマネジメントユニット)まで内蔵しています。

これだけの機能が1個のチップに内蔵しているとなると、その全機能を使うにはかなりの習熟を必要とします。川崎製鉄がインターネット上に公開していたKL5C8012ハードウェアマニュアルだけでもA4版130ページもあります。ここでは主要な点について簡単に、しかしできる限りわかりやすく説明するつもりです。

同マニュアルは川崎製鉄の現在のサイトからはダウンロードできませんが、過去のサイトのアーカイブからはダウンロード可能です(2018年9月現在)。詳しくは当社ホームページ「KL5C80A12マイコンボードの製作」[第31回]を参照してください。

以下の説明中、システムクロックは10MHzです(ZB10K~ZB28K、ND80Kは20MHzクリスタルを使用しており、システムクロックはその1/2になります)。

1. パラレルポートA

Z80PIO相当の機能をもつ8ビット×2ポートのパラレルI/Oポートです。82C55と異なり1ビットごとに入力、出力を設定できます。ポート0は端子名P00~P07、ポート1はP10~P17で、I/Oアドレスは2CH~2FHです。

2CH ポート0、P00~P07データ

2DH ポート0方向制御レジスタ

2EH ポート1、P10~P17データ

2FH ポート1方向制御レジスタ

1.1 P00~P07の入出力方向設定

アドレス2DHに00H~FFHの設定値を出力(OUT)します。1を書き込んだビットが出力に設定され、0を書き込んだビットが入力に設定されます。電源投入時は(2DH)=00Hで全ビット入力になります。また2CHの出力ラッチは全ビット0クリアされます。

(2DH)=FFHにすると全ビット出力になります。

2DHに対してIN命令を実行すると、入出力設定の状態を読み出すことができます。

P00~P07の端子は割り込み入力R0~R7と兼用していますが、初期状態では通常のI/Oポートとして使用できます。ただしP1についてはND80KL/86の外部割込入力INTに割り当てています。

1.2 P10~P17の入出力方向設定

アドレスが変わるだけでP0~P7の設定方法と全く同じです。

アドレス2FHに00H~FFHの設定値を出力(OUT)します。1を書き込んだビットが出力に設定され、0を書き込んだビットが入力に設定されます。電源投入時は(2FH)=00Hで全ビット入力になります。また2EHの出力ラッチは全ビット0クリアされます。

(2FH)=FFHにすると全ビット出力になります。

2FHに対してIN命令を実行すると、入出力設定の状態を読み出すことができます。

P10~P17はカウンタやシリアルインターフェースと同じ端子に割り当てられていますが、カウンタ、シリアルインターフェースを使わなければ、パラレルI/Oとして使用することができます。

[注意]

他の信号と端子を共用しているポートをパラレルポートとして使用しないで、他の機能を使用する場合には、そのビットは入力に設定しなければなりません(P00~P17共通事項)。

[注記1]

(P00~P17共通事項)IN、OUT命令は各ビットの入出力の向きにかかわらず、8ビット同時に行われます。入力に設定されているビットに1、0のいずれを出力しても、出力ラインには反映されずハイインピーダンスになります(実際にはIC内部でVCCに約100kΩでプルアップされているのでつねにHレベルになります)。

出力に設定されているビットから入力を行うと、そのビットの出力ラッチの状態が入力されます。

2. パラレルポートB

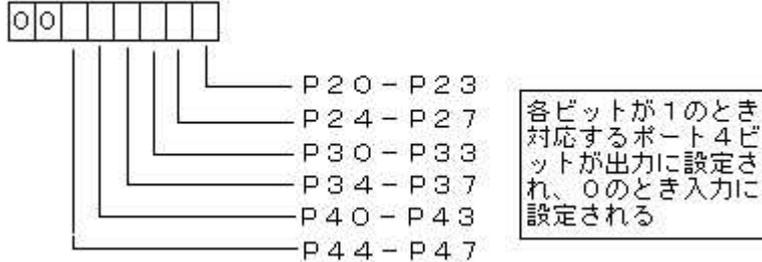
82C55相当の機能をもつ8ビット×3ポートの平行I/Oポートです。平行ポートBとは異なり、上位4ビット、下位4ビットごとに入力、出力を設定します。3ポートとも82C55のCポートの機能を持ち、出力に設定したポートに対しては、他のビットに影響を与えず1ビットのみの出力を行うことができます。

ポート0は端子名P20～P27、ポート1はP30～P37、ポート2はP40～P47で、I/Oアドレスは30H～33Hです。

30H ポート0、P20～P27データ
31H ポート1、P30～P37データ
32H ポート2、P40～P47データ
33H 方向制御レジスタ

2.1 P20～P47の入出力方向設定

アドレス33Hに方向制御コマンドを書き込みます。ポート0～ポート2の方向を1回のコマンド出力で同時に決定します。



たとえば00Hを33Hに出力するとP20～P47が全て入力に設定され、3FHを出力すると全ポートが出力に設定されます。

P40～47はシリアルインターフェースと端子を兼用していますがシリアルインターフェースを使用しなければ平行ポートとして使うことができます。

IN、OUT命令は上位4ビット、下位4ビットが異なる向きに設定されていても、8ビット同時に行われます。入力に設定されているビットに1、0のいずれを出力しても、出力ラインには反映されずハイインピーダンスになります（実際にはIC内部でVCCに約100KΩでプルアップされているのでつねにHレベルになります）。

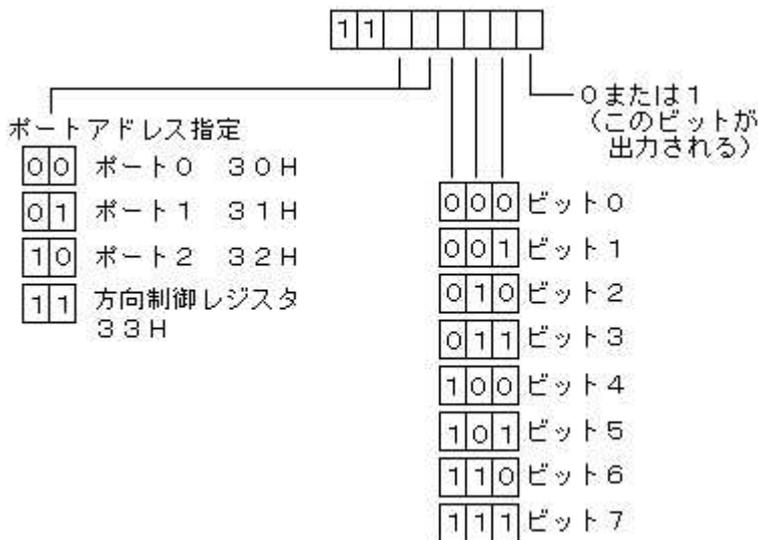
出力に設定されているビットから入力を行うと、そのビットの出力ラッチの状態が入力されます。

[注意1]

他の信号と端子を共用しているポートを平行ポートとして使用しないで、他の機能を使用する場合には、そのビットは入力に設定しなければなりません(P20～P47共通事項)。

2.2 ビット出力制御

ポート0～ポート2を出力に設定しているときは、方向制御レジスタ(33H)にコマンドを出力することで、特定の1ビットだけ出力を変化させることができます。他のビットの出力は変化しません。入力に設定しているビットを指定したときは無視されます(次ページ図参照)。



3. タイマ/カウンタA

プログラマブルな16ビットのダウンカウンタで、コントロールワードアドレスにコントロールワードを書き込むことで動作します。チャンネル0とチャンネル1の2組があり、全く同じ機能をもっています。

1/Oアドレスは下の通りです。

28H チャンネル0カウンタ

29H チャンネル0コントロールワード

2AH チャンネル1カウンタ

2BH チャンネル1コントロールワード

3.1 入出力端子

[XCLK0][XCLK1]

外部クロック入力。カウント動作はXCLKの立下りで行われます。モード設定でシステムクロックを選択しているときは、XCLKは使用されません。XCLK0はチャンネル0、XCLK1はチャンネル1の端子(以下の説明でも同じルールで名前がついています)。

[GATEA0][GATEA1]

この信号がONのときだけカウンタ動作をします。またはトリガ信号として働きます。パルス幅/周期測定モードでは測定対象の信号を入力します。

[OUTA0][OUTA1]

モードの指定により、分周出力、ワンショット出力、ストロブ出力、測定完了出力になります。リセットによりクロックと非同期にLになります。

[注記]各信号端子はパラレルポートと端子を兼用しています。

XCLK0=P11

XCLK1=P13

GATEA0=P10

GATEA1=P12

OUTA0=P34

OUTA1=P35

各端子をパラレルポートではなくてカウンタ用に使用するためには端子機能の設定が必要です(別項で説明)。

3.2 動作モード

4種類の動作モードがあります。

3.2.1 分周モード

ダウンカウンタに初期値を与えることでカウント動作を開始し、カウント値が0になるとOUT出力が変化し、カウンタに初期値を再読み込みダウンカウントを繰り返します。カウント中に新しい初期値が与えられるまでは今までの初期値が繰り返し再読み込まれます。カウント中に新しい初期値が与えられてもすぐに再読み込みはされません。カウント値が0になってから新しい値が初期値として読み込まれます。

モード設定によりカウント初期値はFFFFHになりOUT出力はLになります。OUT出力は0カウントの度にHとLが交互に出力される(トグル出力)か1クロック幅のパルス出力かいずれかを選択できます。

カウント0のタイミングで割り込みを発生させることができます。
GATE入力=Hの期間はカウントイネーブルでGATE入力=Lの期間はカウントしません。
GATE入力のパルス幅はH、Lともにシステムクロックの2サイクル以上が必要です。
初期値として与えることのできる値は0001H~FFFFHです。

3. 2. 2 パルス幅変調(PWM)モード

周期は一定(4通りの中から選択)でH期間のパルス幅がカウント初期値+1になるパルスを繰り返し出力します。周期はカウンタクロックの2のN乗+1(N=6, 8, 10, 12)の4通りから選択します。2の6乗+1=41Hです。以下同様に101H、401H、1001Hになります。Hパルス幅はこの値を超えることはできませんから、与えることのできるカウント初期値の最大値はそれぞれ003FH、00FFH、03FFH、0FFFHになります。最小値は0001Hです。

モード設定によりOUT出力はLになり初期値を与えるとOUT出力=Hになってダウンカウントを開始します。カウンタの値が0になるとOUT出力=Lになり残りの周期期間中Lを維持します。1周期期間が終わるとカウンタ初期値を再読み込みしOUT=Hにして前記動作を繰り返します。カウント中に新しい初期値が与えられてもすぐに再読み込みはされません。カウント値が0になってから新しい値が初期値として読み込まれます。

GATE入力=Hの期間はカウントイネーブルでGATE入力=Lの期間はカウントしません。
GATE入力のパルス幅はH、Lともにシステムクロックの2サイクル以上が必要です。

3. 2. 3 パルスモード

トリガ入力によりダウンカウントを開始しカウント0でOUT出力が変化します。次のトリガが入力されるまでカウンタ動作は停止します。

カウント初期値を与えることでカウントを開始するソフトトリガと、GATE入力信号の立ち上がりでカウントを開始するソフトトリガがあり、モード設定で選択できます。

OUT出力はモード設定でHIになります。カウント開始でLになり、カウント0でHIになるワンショット出力と、カウント0で1クロック幅のLパルスを出力するストローブ出力のいずれかを選択できます。またOUT出力のH、Lが前記の逆になるリバースモードを選択することもできます。

ソフトトリガではGATE入力=Hの期間のみカウント動作をします。

ソフトトリガではカウント中に新しい初期値が与えられると次のクロックでカウンタに初期値をロードしすぐにカウントを開始します。ハードトリガではカウンタ初期値は次に新しい初期値が与えられるまでは、もとの値を保持しています。カウント中に次のトリガが発生すると(GATEに新しい立ち上がり信号が入力されると)、カウンタに初期値を再読み込みしてダウンカウントを再スタートします。カウント中に新しい初期値が与えられてもすぐには再読み込まれず、次のトリガが発生したときにカウンタに再読み込まれダウンカウントがスタートします。ハードトリガ選択時のトリガ間隔はカウンタクロックの1サイクル以上が必要です。

ソフトトリガ選択時のGATE入力のパルス幅はH、Lともにシステムクロックの2サイクル以上が必要です。
カウンタ初期値として与えることのできる値は0001H~FFFFHです。

3. 2. 4 パルス幅/周期測定モード

GATE端子に入力される信号のパルス幅、または周期を測定し、測定が完了するとOUT出力にシステムクロック1サイクル分の幅のパルスを出力します。

測定する期間はGATE入力信号の①立ち上がりから立下りまで②立ち上がりから次の立下りまで③立ち下がりから立上りまで④立ち下がりから次の立下りまでのいずれかが選択できます。また1回のみの測定と繰り返し測定の選択もできます。連続測定モードではカウンタアドレスからは測定完了した最後の測定値が読み出されます。つまりパルス幅/周期測定モードではカウント中のカウンタの値ではなくてカウンタバッファの値が読み出されることになります。読み出される値は測定期間中にカウントしたカウンタクロック数です。カウント中の値を読み出すことはできません。

GATE入力のパルス幅はH、Lともにシステムクロックの2サイクル以上が必要です。

このモードでは初期値の設定はできません。モードセットによりFFFFが初期値としてセットされます。GATE設定条件に合致するパルスの入力によりカウントダウンを開始します。停止条件に合致するパルス入力によりカウントを停止し、データレジスタにカウンタ値の補数を送ります。次のGATE入力パルスによりふたたびFFFFがセットされ、カウントダウンを繰り返します。

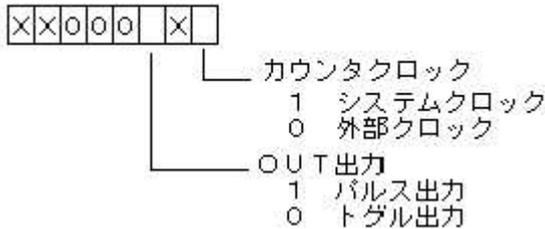
3. 3 リセット時の動作

リセットによりカウンタ動作は停止します。カウンタの値はFFFFHになります。
分周モード(システムクロック選択、トグル出力)が選択され、OUT出力はLになります。

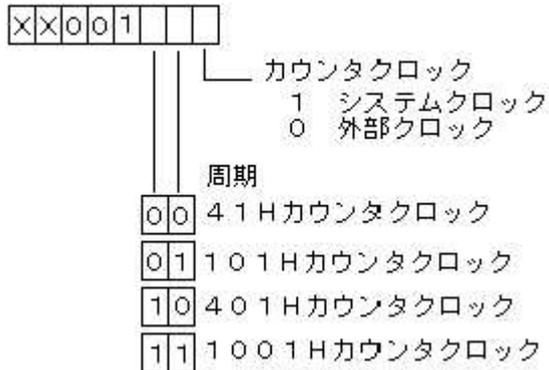
3. 4 モード設定

モード設定は各チャンネルのコントロールワードアドレス(29H、2BH)にコントロールワードを書き込むことで行われます。

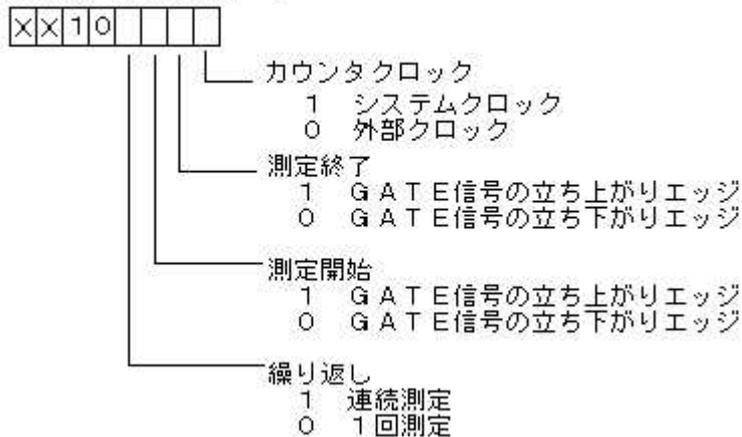
分周モード



パルス幅変調(PWM)モード



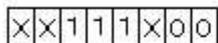
パルス幅/周期測定モード



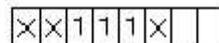
3.5 コマンド

コントロールワードアドレス(29H、2BH)にコマンドを書き込むことで、データのラッチやフラグのクリアを行います。

カウンタラッチコマンド



クリアコマンド



- シーケンスクリア
1 する
0 しない
- フラグクリア
1 する
0 しない

3.5.1 カウンタラッチコマンド

カウンタアドレスに対して読み出しを実行すると、パルス幅/周期測定モードでは最後に測定完了してバッファにラッチされた値が読み出されます。その他のモードでは設定されている初期値が読み出されます。

しかし現在動作中のカウンタの値を読み出したいときがあります。この場合カウンタはカウント動作中なので安定したデータの読み出しはできません。カウンタラッチコマンドをカウンタデータの読み出しに先立って実行することによってそのときのカウンタ値がラッチされ、その後カウンタデータアドレスに対して2回の読み出しをすると、ラッチされたカウンタ値が読み出せます。ラッチされた値は次にカウンタラッチコマンドが実行されるか、データの読み出しが完了するまで保持されます。言いかえると、ラッチされた「カウン

ト途中のカウンタ値」はデータの読み出しが完了するとクリアされ、次にカウンタラッチコマンドが実行されるまでは、カウンタアドレスに対する読み出しでは、つねに最後に測定完了した値か初期値になります。

3.5.2 リードライトシーケンスクリアコマンド

カウンタの値は16ビットなので値の設定も読み出しも下位、上位2回のアクセスが必要です。プログラムの流れで1回目のアクセスか2回目かが定かにならない場合が発生します。リードライトシーケンスクリアコマンドの実行によって、シーケンスがクリアされ、次のデータアクセスを1回目とすることができます。

3.5.3 フラグクリアコマンド

パルスモードでのトリガ受けつけフラグ、パルス幅／周期測定モードでの測定完了フラグ(ステータス情報のD7ビット)をクリアします。クリアコマンドでD0、D1ビットを0にすると、カウンタラッチコマンドになります。

3.6 カウンタへのカウンタ初期値の設定

カウンタの値は16ビットなので、データの書き込みは下位8ビット、続いて上位8ビットの順に2回に分けて行います。書き込みはリセット直後か、モード設定直後か、リードライトシーケンスクリアコマンド直後かのいずれかに限り有効です。カウンタアドレス(28H、2AH)に対しておこないます。

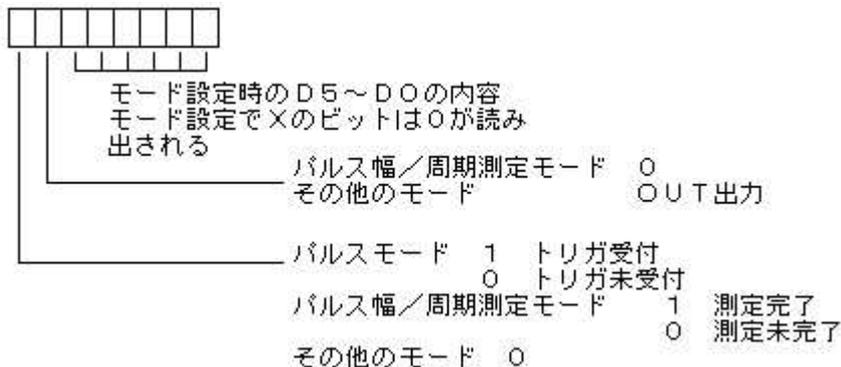
3.7 カウンタの読み出し

現在進行中のカウンタの値の読み出しは、カウンタラッチコマンド実行直後にカウンタアドレス(28H、2AH)に対する2回の読み出しによってのみ行われます(1回目に下位8ビット、2回目に上位8ビットが読み出される)。カウンタラッチコマンドによってラッチされたカウンタ値は読み出しが完了するか次にカウンタラッチコマンドが実行されるまで保持されています。カウンタラッチコマンド実行直後以外のタイミングでカウンタアドレスに対して読み出しを行うと、カウンタ終了によりバッファにラッチされた値が読み出されず。

[注記]直後というのは時間的なことではなくて、それ以後、カウンタに対するはじめてのアクセスを行うという意味です。

3.8 ステータスの読み出し

コントロールワードアドレス(29H、2BH)に対して読み出しを行うとステータスが得られます。



4. タイマ/カウンタB

プログラマブルな16ビットのプリスケアラ付ダウンカウンタで、コントロールワードアドレスにコントロールワードを書き込むことで動作します。チャンネル0～2の3組があり、基本的には同じ機能をもっています。

ダウンカウントされるクロックはシステムクロックをプリスケアラで分周したクロックを入力します。

I/Oアドレスは下の通りです。

20H チャンネル0カウンタ
21H チャンネル0コントロールワード
22H チャンネル1カウンタ
23H チャンネル1コントロールワード
24H チャンネル2カウンタ
25H チャンネル2コントロールワード

[注意]

チャンネル1はKL5C8012内蔵シリアルインターフェース(RS232C)のクロックとして使用しています。ユーザーが232Cを利用するときはチャンネル1をその他の用途に使うことはできません。

4.1 入出力端子

[GATEB0][GATEB1][GATEB2]

この信号がONのときだけカウンタ動作をします。GATEB0はチャンネル0、GATEB1はチャンネル1、GATEB2はチャンネル2の端子(以下の説明でも同じルールで名前がついています)。

GATEはシステムクロックの4分周を入力クロックとするとき以外は使えません。

[OUTBP0][OUTBP1][OUTBP2]

モードの指定により、分周出力、PWM出力になります。リセットによりクロックと非同期にLになります。

[OUTBS0][OUTBS1][OUTBS2]

4システムクロック幅のストロブを出力します。

[SYNC]

システムクロックを4分周した信号です。この信号の立ち上がりエッジでGATE入力がサンプリングされます。

[注記]

各信号端子は、パラレルポートと端子を兼用しています。

GATEB0=P00

GATEB1=P01

GATEB2=P02

OUTBP0=P36

OUTBP1=P32

OUTBP2=P33

OUTBS0=P30

OUTBS2=P37

SYNC=P31

OUTBS1端子はありません。

各端子をパラレルポートではなくてカウンタ用に使用するためには端子機能の設定が必要です(別項で説明)。

4.2 動作モード

4種類の動作モードがあります。

4.2.1 連続カウントモード

ダウンカウンタに初期値を与えることでカウント動作を開始し、カウント値がFFFFになるとOUTP出力とOUTS出力が変化し、カウンタに初期値を再読み込みしダウンカウントを繰り返します。カウント中に新しい初期値が与えられるまでは今までの初期値が繰り返し再読み込まれます。カウント中に新しい初期値が与えられてもすぐに再読み込みはされません。カウント値がFFFFになってから新しい値が初期値として読み込まれます(ダウンカウントの終了値は0ではなくてFFFFです)。

モード設定によりOUTP、OUTS出力はLになります。カウント初期値の書き込みによりダウンカウントが開始されOUTP出力はHになります。OUTP出力は0カウントの度にHとLが交互に出力されます(トグル出力)。OUTSは0カウント時に4システムクロック幅のHパルスを出します。

OUTP、OUTS出力はモード設定で前記説明のHとLを入れ替えた出力にすることができます。

カウント0のタイミングで割り込みを発生させることができます。

GATE入力=Hの期間はカウントイネーブルでGATE入力=Lの期間はカウントしません。

初期値として与えることのできる値は0001H~FFFFHです。

4.2.2 単発カウントモード

カウント初期値を与えることでダウンカウントを開始しカウント0でOUTP、OUTS出力が変化します。次のカウント初期値が与えられるまでカウンタ動作は停止します。

OUTP、OUTS出力はモード設定でLになります。OUTPはカウント開始でHになり、カウント0でLになります。OUTSは0カウント時に4システムクロック幅のHパルスを出します。

カウンタ初期値として与えることのできる値は0001H~FFFFHです。

4.2.3 パルス幅変調(PWM)モード

カウント初期値によって与えられるパルス幅とパルス周期によって決定される繰り返しパルスをOUTPから出力します。

パルス幅はデータの上位8ビットで与え、周期は下位8ビットで与えます。

パルスを決定するカウンタ動作は上位8ビットと下位8ビットが独立して行われます。すなわち設定値の(上位8ビット+1)×カウンタ入カクロックがパルス幅になり、(下位8ビット+1)カウンタ入カクロックが周期になります。

モード設定によりカウンタは停止し、OUTP、OUTS出力はLになります。

カウント初期値の書き込みによりカウンタ動作を開始します。

パルス幅データ>=周期データのときはOUTP=Hのままになります。

カウント初期値の再読込は下位バイトカウンタが0になったときに行われます。カウント途中で初期値を書き込んでもすぐにカウンタには読みこまれません、下位バイトが0になった時点で新しい設定値が読みこまれます。

カウンタ初期値として与えることのできる値は上位、下位ともに01H~FFHです。

4.2.4 ウォッチドッグタイマ(WDT)モード

特殊な使い方で通常は使用しないため、説明を省略します。

4.3 OUTP出力とOUTS出力

OUTP出力はカウント0になる度に反転出力し、カウント開始時の出力のH/Lをモード設定により選択できます。OUTS出力はカウント0で4システムクロック幅のHパルスを出します。モード設定によって反転出力にすることはできません(常にHパルス出力)。

4.4 リセット時の動作

リセットによりカウンタ動作は停止します。カウンタの値はFFFFHになります。

単発カウントモード(256分周、OUTP非反転出力)が選択され、OUTP、OUTS出力はLになります。

4.5 モード設定

モード設定は各チャンネルのコントロールワードアドレス(21H、23H、25h)にコントロールワードを書き込むことで行われます(次ページ図参照)。



4.6 カウンタへのカウンタ初期値の設定

カウンタアドレス(20H、22H、24H)に対しておこないます。

カウンタの値は16ビットなので、データの書き込みは下位8ビット、続いて上位8ビットの順に2回に分けて行います。書き込みと読み出しとで同じバッファを共用しているため、書き込みが完了する前に読み出しを行うと書き込みデータが壊れます。

プログラムの実行順序によっては、1回目の書き込み(下位8ビットの書き込み)のつもりでも、実際には2回目のアクセスになってしまっていることがあります。ステータスの読み出しをするとデータリードライトシーケンスがクリアされるので、ステータスの読み出しを実行してからデータの書き込みを行うようにします。

4.7 カウンタの読み出し

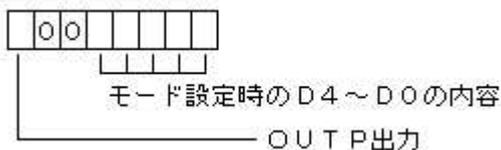
カウンタアドレス(20H、22H、24H)に対しておこないます。

カウンタの値は16ビットなので、データの読み出しは下位8ビット、続いて上位8ビットの順に2回に分けて行います。下位8ビットを読み出す時点で上位8ビットもバッファにラッチされているので、下位と上位は時間的に同一時点のデータとして読み出せます。ただし書き込みと読み出しとで同じバッファを共用しているため、読み出しが完了する前に書き込みを行うと読み出しデータが壊れます。

プログラムの実行順序によっては、1回目の読み出し(下位8ビットの読み出し)のつもりでも、実際には2回目のアクセスになってしまっていることがあります。ステータスの読み出しをするとデータリードライトシーケンスがクリアされるので、ステータスの読み出しを実行してからデータの読み出しを行うようにします。

4.8 ステータスの読み出し

コントロールワードアドレス(21H、23H、25H)に対して読み出しを行うとステータスが得られます(図11-7)。ステータスの読み出しをするとデータリードライトシーケンスがクリアされます。



5. シリアルインターフェース

KL5C8012は1チャンネルのシリアルインターフェースをもっています。232Cのレベル変換回路を外につけることで他の機器やパソコンとの間で232Cを利用したデータの送受信を行うことができます。

6. 割り込みコントローラ

KL5C8012(Z80A)は8080の割り込みモード(モード0)の他に融通性の高い割り込みとしてモード2をサポートしています。割り込みは高度のプログラムテクニックが必要でハードウェアの知識も必要です。特に複数の異なる回路から同時に割り込みが発生したときなど、処理の順番などより複雑な制御が必要になります。

KL5C8012内蔵の割り込みコントローラは簡単なコマンド操作で内蔵のカウンタやパラレルポートからの割り込み信号をうまく交通整理してくれます。

8080ファミリの割り込みコントローラなどの汎用コントローラとは異なり、KL5C8012内蔵の機能ユニットからの割り込みをコントロールするように特化していますが、多くの場合その方が処理が簡単に済むので有利です。

優先順位のついた16レベルの割り込みに対応しています。16本の割り込みはカウンタ/タイマ、シリアルインターフェースの他、パラレルポートからの8本の割り込み入力に対応しています。それぞれから発生する割り込みはまず割り込みコントローラに取り込まれ、優先順位にしたがってCPUにINT信号を送るとともにそれぞれに対する割り込みプログラムアドレスを示す割り込みベクタを送ります。その後も割り込みコントローラはCPUのバスを監視していて、割り込みプログラムの終了を示すRETI命令コードの実行を確認するとその割り込みの終了処理を行い、待たせていたより低位の割り込みがある場合にはその割り込みを許可してそのための処理を行います。

プログラミングとしては、個々の必要な割り込みプログラムを書いて、そのエントリアドレスを示す割り込みテーブルを用意して、そのアドレスを割り込みコントローラに与えるだけで準備が完了します。あとは必要なタイミングで個々の割り込みに対する許可、不許可を割り込みコントローラに与えれば割り込み処理はオートマチックに実行されます。

6.1 割り込み番号

KL5C8012は下記16個の割り込みをサポートしています。

	割り込み要求元
IR[15]	タイマ/カウンタBチャンネル2OUTS出力
IR[14]	タイマ/カウンタBチャンネル1OUTS出力
IR[13]	タイマ/カウンタBチャンネル0OUTS出力
IR[12]	タイマ/カウンタAチャンネル1OUT出力
IR[11]	タイマ/カウンタAチャンネル0OUT出力
IR[10]	USART(シリアルインターフェース) TXEMPTY出力
IR[9]	USART(シリアルインターフェース) RXRDY出力
IR[8]	USART(シリアルインターフェース) TXRDYPIN出力
IR[7]	外部入力P07/IR7
IR[6]	外部入力P06/IR6
IR[5]	外部入力P05/IR5
IR[4]	外部入力P04/IR4
IR[3]	外部入力P03/IR3
IR[2]	外部入力P02/IR2
IR[1]	外部入力P01/IR1
IR[0]	外部入力P00/IR0

[注意]

IR[0]~IR[7]はパラレルポートP00~P07と端子を共用しています。

IR0~IR7の割り込みを使用しないで、パラレルポートを出力として使う場合は、対応するIR入力をマスク状態に設定してください。

6.2 割り込みコントローラのレジスタとI/Oアドレス

以下のレジスタが有ります。

I/Oアドレス	OUT(書き込み)	IN(読み出し)
34H	LERL/PGRL	ISRL
35H	LERH/PGRH	ISRH
36H	IMRL	IMRL
37H	IVR/IMRH	IMRH

6.2.1 LER(Level/Edge Register) 書き込み専用(読み出し不可)

割り込み要求入力(CPUに対するINT信号に相当、以下の説明ではIR入力とします)信号のレベルとエッジのモード切り替えを制御します。

各IR入力ごとに設定できます。リセット後はすべてのビットが0(レベル)になります。このレジスタへの書き込みはIVR設定前に行う必要があります。

	D7	D6	D5	D4	D3	D2	D1	D0
LERH	LER[15]	LER[14]	LER[13]	LER[12]	LER[11]	LER[10]	LER[9]	LER[8]
	D7	D6	D5	D4	D3	D2	D1	D0
LERL	LER[7]	LER[6]	LER[5]	LER[4]	LER[3]	LER[2]	LER[1]	LER[0]

LER[n]	
0	LEVEL
1	EDGE

[注意]

タイマ/カウンタの割り込みを使用する場合には、対応するIRビットを1(エッジモード)にする必要があります。

[注記]

レベルモードの設定では信号のタイミングによって不正割り込みが発生し、全ての割り込みが受付不可になってしまうことがあります。支障の無い限りエッジモードに指定する方が安全です。

6. 2. 2 PGR(Priority Group Register) 書き込み専用(読み出し不可)

IR入力の優先順位グループを設定します。IR入力は番号が大きい方が優先順位が高くなっています(IR[15]が最高でIR[0]が最低)。各IRをHIGH/LOWのいずれかにグループ分けすることで優先順位を変更することができます。リセット後は全ビットが0(Low)になります。このレジスタへの書き込みはIVR設定後にしか行えません。通常使用する頻度は低いと思われることからここではこれ以上詳しい説明は省略します。

	D7	D6	D5	D4	D3	D2	D1	D0
PGRH	PGR[15]	PGR[14]	PGR[13]	PGR[12]	PGR[11]	PGR[10]	PGR[9]	PGR[8]
	D7	D6	D5	D4	D3	D2	D1	D0
PGRL	PGR[7]	PGR[6]	PGR[5]	PGR[4]	PGR[3]	PGR[2]	PGR[1]	PGR[0]

PGR[n]	
0	LOW
1	HIGH

6. 2. 3 IMR(Interrupt Mask Register) 書き込み読み出し可

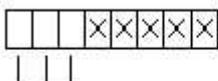
IR入力のマスク状態を設定します。リセット後は全てのビットが1(マスク状態)になっています。マスク状態のIR入力は割り込み許可されません。このレジスタへの書き込みはIVR設定後にしか行えません。

	D7	D6	D5	D4	D3	D2	D1	D0
IMRH	IMR[15]	IMR[14]	IMR[13]	IMR[12]	IMR[11]	IMR[10]	IMR[9]	IMR[8]
	D7	D6	D5	D4	D3	D2	D1	D0
IMRL	IMR[7]	IMR[6]	IMR[5]	IMR[4]	IMR[3]	IMR[2]	IMR[1]	IMR[0]

IMR[n]	
0	no MASK
1	MASK

6. 2. 4 IVR(Interrupt Vector Register) 書き込み専用(読み出し不可)

モード2の割り込み発生時にCPUに送るベクタアドレスの上位3ビットを設定します。このレジスタに書き込みを行う前と後で書き込み可能なレジスタが変化します。



割り込みベクタの上位3ビット

6. 2. 5 ISR(In Service Register)読み出し専用(書き込み不可)

CPUが受けつけて処理中の割り込みに対応するビットがセットされ、RETIが実行されると解除します。

このビットがセットされているとき(サービス中のとき)は、それより低いレベルの割り込みは受けつけられません。またサービス中の割り込みは重ねて受けつけはされません。

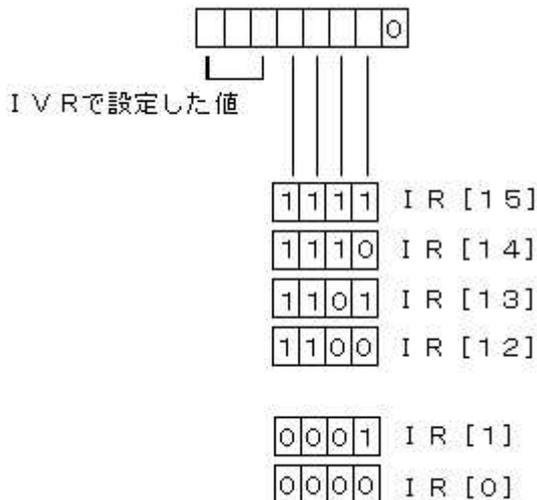
	D7	D6	D5	D4	D3	D2	D1	D0
ISRH	ISR[15]	ISR[14]	ISR[13]	ISR[12]	ISR[11]	ISR[10]	ISR[9]	ISR[8]
	D7	D6	D5	D4	D3	D2	D1	D0
ISRL	ISR[7]	ISR[6]	ISR[5]	ISR[4]	ISR[3]	ISR[2]	ISR[1]	ISR[0]

PGR[n]	
0	非サービス中
1	サービス中

6.3 割り込みベクタの出力

CPUが割り込みを受け付けて割り込みコントローラにアクノリッジを返すと、割り込みコントローラは割り込みレベルに対応する割り込みベクタを、IVRの値と割り込み番号から合成して出力します。CPUはこの値を割り込みテーブルアドレスの下位8ビットとし、そのときのレジスタの値をアドレスの上位8ビットとすることで、割り込みテーブル中で該当する割り込みプログラムアドレスを算出して、そこにジャンプします。

ZB10K~ZB28K、ND80Kでは割り込みテーブルはRAMのFEE0H~FEFFHに置いてあります。ND80Kはモニタプログラムスタート時点でレジスタにFEHをセットするとともに、割り込みベクタとして割り込みコントローラにEOHを与えます。



6.4 レジスタ設定シーケンス

割り込みコントローラのレジスタはLERとPGRが同一のアドレス34H、35Hに割り付けられ、IVRとIMRHも同一のアドレス37Hに割り付けられています。書き込み時にはどちらのレジスタが選択されるかを決定しなければなりません。KL5C8012はアクセスする順序で選択を決定しています。リセット後は必ずLERを設定します。次にIVRを設定します。この両レジスタはリセット後ただ1回だけ設定が可能です。ND80KL/86はモニタプログラムのスタート時点でこのレジスタに書き込みを行っていますからユーザーがLERとIVRを設定することはできません(ND80KL/86モニタはLERL=FFH、LERH=FFH、IVR=EOHに設定しています)。

このあとはIMRとPGRの設定しかできません。IMRとPGRは必要なら何回でも設定ができます。

6.5 割り込み要求の受付

レベルモードではIR入力のHレベルを割り込み要求として認識します。CPUが割り込みに応答した時点でIR=Lになっていると不正割り込みになります。リセット後は全IRがレベルモードになりますがND80KL/86モニタはスタート時点で全IRをエッジモードに設定しています。

エッジモードではIR入力の立ち上がりエッジを割り込み要求として認識します。該当する割り込みレベルがマスクされていた場合や、優先順位が低くて受け付けられなかった場合でも割り込み要求は保持されます(IR入力が無くなってもクリアされません。不正割り込みにはなりません)。受付可能になった時点でCPUに対して割り込みが発生します。

IR入力が割り込みコントローラに認識された状態で保留されているときに重ねて同じレベルのIR入力があった場合には後からの入力は重ねて保持はされません。

IR入力が割り込みコントローラに受けつけられると、CPUが割り込み受付可能になったタイミングで割り込みコントローラからCPUにINT信号が出されます。CPUがアクノリッジを返して割り込みコントローラが割り込みベクタを出力した時点でISRがセットされます。ISRはCPUがRETIを実行するまでクリアされません。ISRがセットされた時点で同じレベルの次のIR入力が受付可能になります。

6.6 リセット時の動作

IMRはFFFFHになります(全IRマスク状態)。

ISR、LER、PGRは0000Hになります。

IVRは未設定の状態になります。割り込みを使用するにはIVRの設定が必要です。ND80KL/86モニタはスタート時点でIVRとLERを設定しますからユーザーが設定する必要はありません(設定できません)。

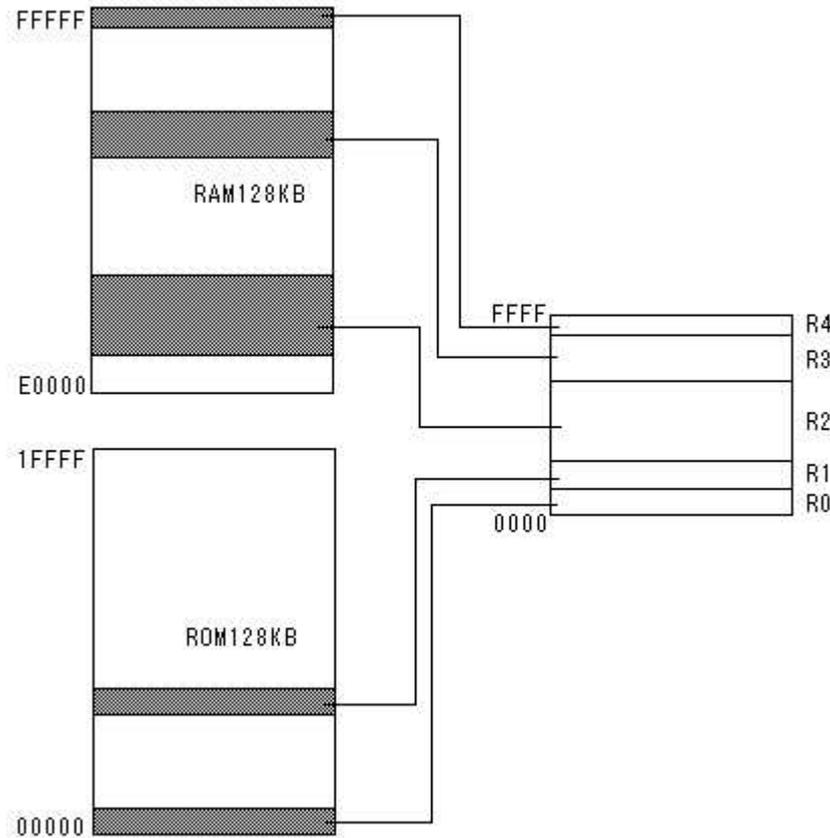
ND80KL/86モニタはLERL=FFH、LERH=FFH、IVR=E0Hに設定しています。

7. MMU(メモリマネジメントユニット)

KL5C8012(Z80A)がメモリをアクセスする命令は16ビット長です。16ビットでは0000H~FFFFHの64KBのメモリアドレスしかアクセスできません。KL5C8012は最大512KBのメモリ空間を内蔵のMMUの助けを借りてアクセスすることができます。MMUはバンク切り替えという方法で512KBのメモリアドレスの中から任意の64KBをCPUのアクセスできるメモリ空間に割り当てます。

次図のように64KBの空間をR0~R4の5個のブロックに分割します。分割するメモリサイズは1KB単位で行うことができます。

この各ブロックを実際のROM、RAMアドレスに結び付けます。MMUにパラメタを与えることでR0~R4のメモリアドレスに対してアクセスすると、左側に図示されているそれぞれのメモリがアクセスされます。この結び付けのために00H~07HのI/Oアドレスが使用されます。00H~07Hにルールに従って算出した値をセットすることでこの機能が実現されます。

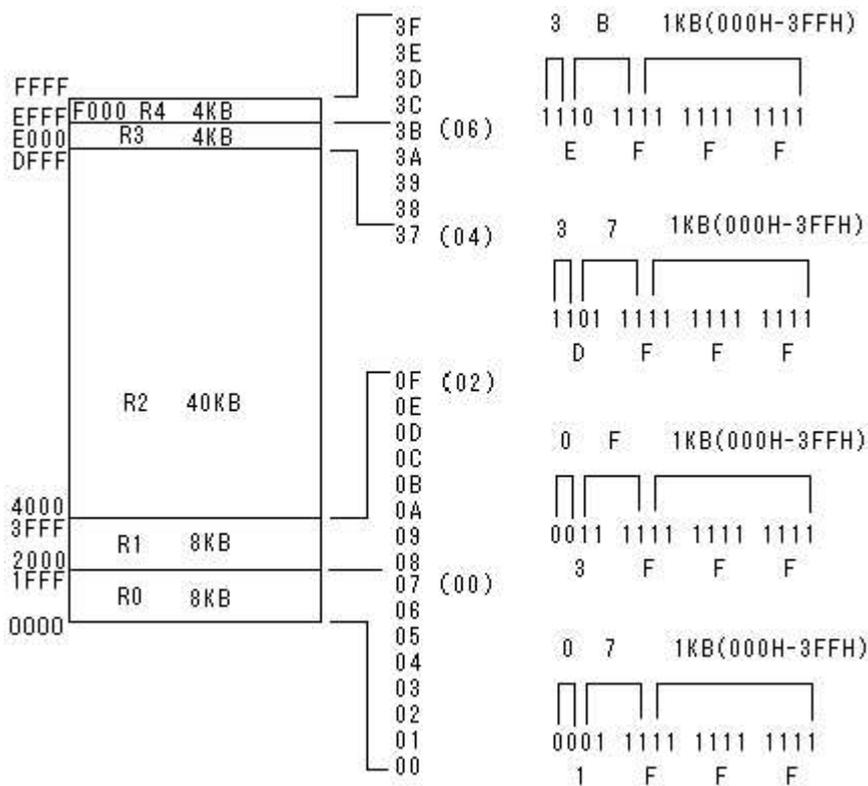


具体例で説明します。

- R4 F000H—FFFFH 4KB
- R3 E000H—EFFFH 4KB
- R2 4000H—DFFFH 40KB
- R1 2000H—3FFFH 8KB
- R0 0000H—1FFFH 8KB

まずこの境界のアドレスをMMUに与えます。境界のアドレスは各ブロックの最後のアドレスになります。1FFFH、3FFFH、DFFFH、EFFFHの4つになります。このアドレスを00H、02H、04H、06Hの各アドレスに対して書き込むのですが、アドレスは16ビットであるのに対して書き込むデータは1バイト(8ビット)ですからこのままでは書き込めません。工夫が必要になります。

ブロック分割の最小単位は1KBと定義されています。とすると次図に示したように境界のアドレスの下位10ビット(ビット0~ビット9)は必ず1になります。ですからこの部分は外してしまいます。そしてあらためてビット10~ビット15までの6ビットに注目すると、00~3Fという数値で表現できることになります。これは0000Hから1KBごとに区切ってそこに先頭から00、01、02とナンバーをふっていったときのそのナンバーを示していることにもなります。R0ブロックは8KBなのでその終りは1KBずつに区切った8番目(07)になります。R1も8KBですから前から16KBということになり、その終りは16番目(0F)になります。どちらの考えでも同じことです。そのようにして算出すると、前図のマップの場合、I/Oアドレス00Hには07Hを、02Hには0FHを、04Hには37Hを、06Hには3BHを書き込めばよいことになります。



次に結び付けられる実メモリアドレスの算出です(次図)。

実はメモリの割り当て方には固定部分があります。一番先頭のブロック(図ではR0)はROMの00000Hから割り当てなければいけません。また一番最後のブロック(図ではR4)はRAMの最後FFFFFFHがブロックの終りになるように割り当てなければいけません。

先ほどは境界を前のブロックの最後のアドレスで示しました。今度は割り当てたいブロックの先頭アドレスと実際のメモリアドレスを重ねるように配置します。すでに説明しましたようにR0は0000Hが先頭アドレスでこれはROMの00000Hに割り付けることとなりますから、決まってしまう。したがってR1~R4について指定することになります。

次図ではR1はROMの0E000Hから始めるメモリエリアと結びつけるようになっています。これをMMUIに示さなければいけません。

これについてはKL5C8012の説明書では判りにくい説明をしています。ここでは次のようにかんがえます。対象としているブロックを64KBの空間ごと、実際のメモリにもって行ってアドレスを重ね合わせます。R1の場合、2000H-3FFFHのブロックを0E000Hからの実メモリエリアに重ねます。このときの0000Hに相当する実メモリアドレスがMMUIに与えるべきデータになります。図では0C000Hになります。実際にはその上位8ビットをMMUIに与えます。つまり0CHです。これは計算では割り付ける実メモリアドレスの上位8ビットからR1~R4の先頭アドレスの上位4ビットの値を引くことで求められます。このようにして得た0CHをI/Oアドレス01Hに書き込みます。

R2は4000H-DFFFHのブロックを0F000Hからの実メモリエリアに重ねます。このときの0000Hに相当する実メモリアドレスはEC000Hになります。その上位8ビット、ECHをI/Oアドレス03Hに書き込みます。ECHは図にもあるようにF0-4の計算から求められます。

R3はE000H-EFFFHのブロックをE2000Hからの実メモリエリアに重ねます。このときの0000Hに相当する実メモリアドレスはD4000Hになります。その上位8ビット、D4HをI/Oアドレス05Hに書き込みます。D4HはE2-Eの計算から求められます。D4000Hはメモリが存在しないアドレスですが構いません。

R4に対する制御データを書き込むI/Oアドレスは07ですが、この値は常にF0Hになります。前に説明した最後のブロックの条件、終りのアドレスはFFFFFFHに割り付けなければならない、ということから決まってしまう。KL5C8012によってI/Oアドレス07HにはF0Hが常に設定されるため、ユーザーが書き込む必要はありません。

[注記1]

ここではR0-R4の全ブロックをアクティブにするように設定しましたが、必要な設定のみ行うこともできます。R0-R4設定のルールはI/Oアドレスに与える値が(00H) < (02H) < (04H) < (06H)になるように設定したときに全てのブロックが有効になるということです。値が等しいか大小関係が逆転すると、その境界の後ろのブロックが有効になり前のブロックが消滅します。R0:R1の境界データは(00H)です。(00H)の値として00Hを設定するとR1が有効になりR0が消滅します。

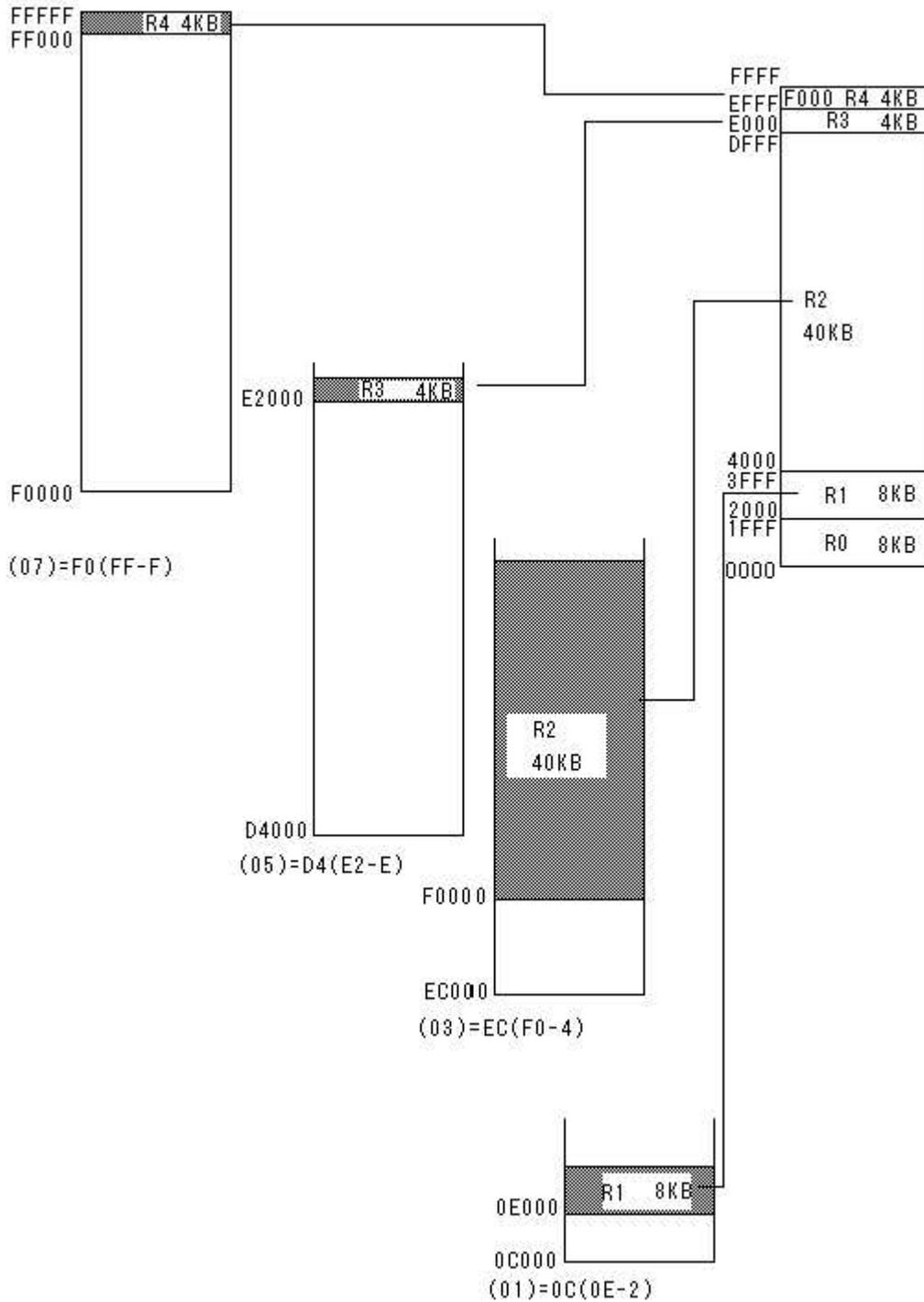
リセット後は(00H) = (02H) = (04H) = (06H) = 3FH、(01H) = (03H) = (05H) = 00H、(07H) = F0H(固定)になります。この設定ではR0のみになり64KBがROMの00000H-0FFFFHになります。

ZBK-V3BASICにエンリすると(00H) = 07H、(02H) = 0FH、(04H) = 37H、(06H) = 3BH、(01H) = 0CH、(03H) = F0H、(05H) = F0Hに設定します。

[注記2]

ここで説明した方法は簡易型で設定できるアドレスに制約があります。

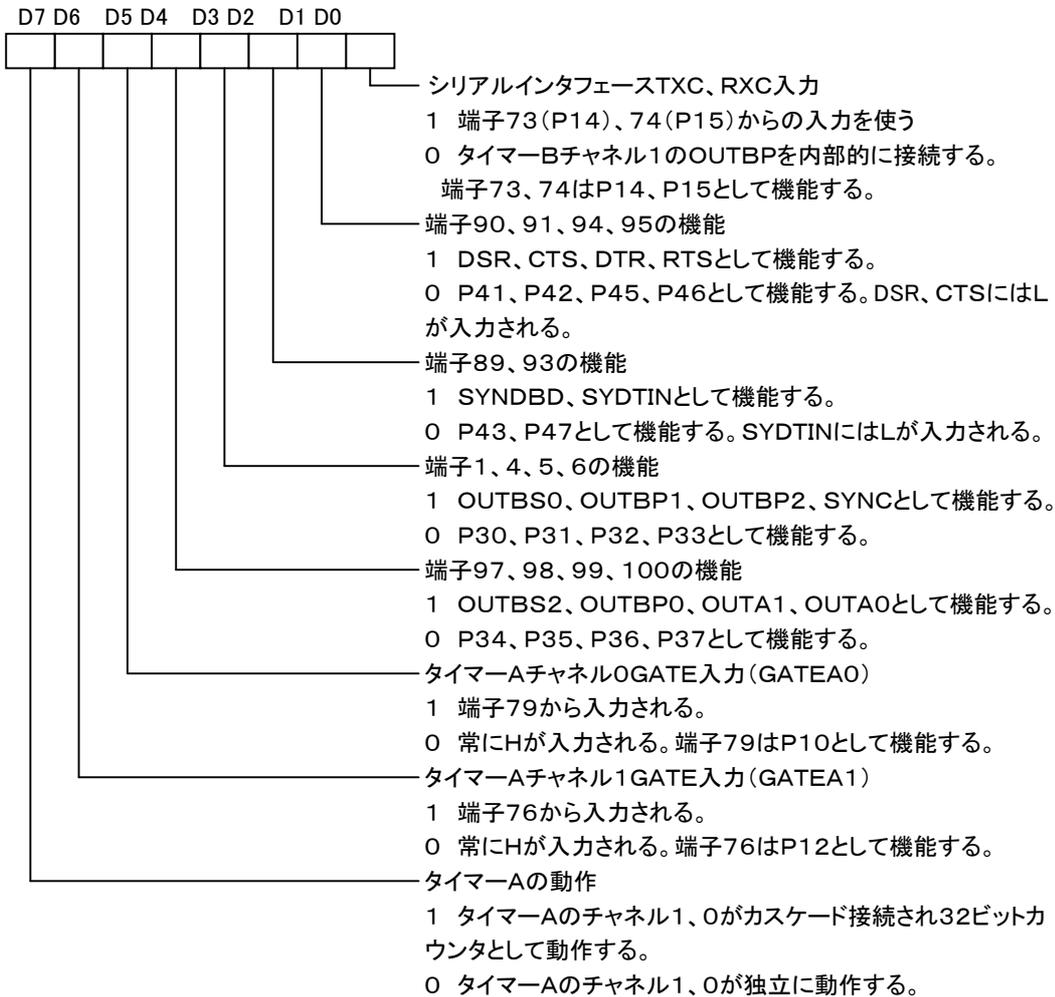
ここでの例ではブロックの大きさは4KB単位になっています。実際には1KB単位の設定が可能です。しかしその場合には(01H)、(03H)、(05H)で行った計算では不足になります。メモリアドレスの上位8ビット、上位4ビットを対象にしていますから、4KB単位の計算をしています。この下の2ビットの計算が必要になります。算出した結果の2ビットは、空きになっている(00H)、(02H)、(04H)、(06H)の上位2ビットに入れられます。計算が面倒になってわかりづらくなりますし、1KB単位でブロックを設定する必要性はそれほどないと思いますので、ここで説明したように4KB単位で使う方が得策です。



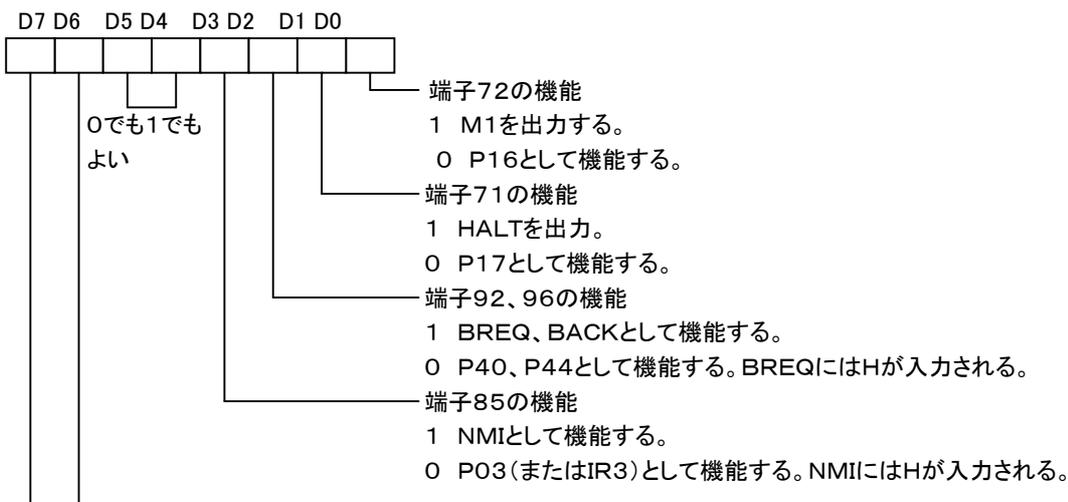
8. 動作モードの設定

KL5C8012は限られた端子数に対してできるだけ多くの機能を実現するために、1本の端子に複数の機能を割り当てています。パラレルポートとカウンタ/タイマ/シリアルインターフェースの入出力が同じ端子に割り当てられています。どちらの端子を利用するかはシステムコントロールレジスタSCR0(I/Oアドレス=3AH)、SCR1(I/Oアドレス=3BH)に設定値を書き込むことで決定されます。

SCR0



SCR1



外部バスウェイトコントロール(次ページの表参照)

	外部メモリ(00000H-7FFFFH)	外部メモリ(80000H-FFDFFFH)	外部I/O
0 0	1ウェイト	1ウェイト	2ウェイト
0 1	1ウェイト	1ウェイト	2ウェイト
1 0	1ウェイト	0ウェイト	1ウェイト
1 1	0ウェイト	0ウェイト	1ウェイト

FFE00H~FFFFFFHには常にKL5C8012内蔵RAMが割り当てられます。

9. 命令実行時間

KL5C8012はZ80A(4MHz、6MHz)に比べて10MHzとCPUクロックとしても約倍速になりますが、さらに独自のアーキテクチャによって実行時間が短縮されており、Z80Aで4クロックかかっていた命令は1クロックで実行されます。

プログラムで正確なパルスを作りたいときなど、命令の実行時間を計算してパルス幅を求めます。

10MHzの1クロックは100nsecです。たとえば2クロックの命令は200nsecで実行されることとなりますが、ND80KL/86ではメモリアクセスに1クロックウェイトしていますから、その命令のメモリアクセス数(バイト数)分だけのクロックタイムが加算されます。その上にI/Oアクセス命令はI/Oリードライト時に+1クロックウェイトしていますからその分の加算も必要です。

KL5C8012命令説明書ではウェイトを加算した実際のクロック数を各命令毎に記してあります。

10. KL5C8012内部回路のI/Oアドレス

I/O アドレス	ブロック名	OUT(書込み)時の機能	IN(読出し)時の機能
00	MMU	BBR1(境界/ベースレジスタ1)	BBR1(境界/ベースレジスタ1)
01		BR1(ベースレジスタ1)	BR1(ベースレジスタ1)
02		BBR2(境界/ベースレジスタ2)	BBR2(境界/ベースレジスタ2)
03		BR2(ベースレジスタ2)	BR2(ベースレジスタ2)
04		BBR3(境界/ベースレジスタ3)	BBR3(境界/ベースレジスタ3)
05		BR3(ベースレジスタ3)	BR3(ベースレジスタ3)
06		BBR4(境界/ベースレジスタ4)	BBR4(境界/ベースレジスタ4)
07		BR4(ベースレジスタ4)	BR4(ベースレジスタ4)
08-1F	川崎製鉄に	より使用予約	
20	タイマ/カウンタ B	チャネル0カウンタ	チャネル0カウンタ
21		チャネル0コントロールワード	チャネル0ステータス
22		チャネル1カウンタ	チャネル1カウンタ
23		チャネル1コントロールワード	チャネル1ステータス
24		チャネル2カウンタ	チャネル2カウンタ
25		チャネル2コントロールワード	チャネル2ステータス
26	川崎製鉄に	より使用予約	
27	川崎製鉄に	より使用予約	
28	タイマ/カウンタ A	チャネル0カウンタ	チャネル0カウンタ
29		チャネル0コントロールワード	チャネル0ステータス
2A		チャネル1カウンタ	チャネル1カウンタ
2B		チャネル1コントロールワード	チャネル1ステータス
2C	パラレルポート A	ポート0	ポート0
2D		ポート0方向制御レジスタ	ポート0方向制御レジスタ
2E		ポート1	ポート1
2F		ポート1方向制御レジスタ	ポート1方向制御レジスタ
30	パラレルポート B	ポート0	ポート0
31		ポート1	ポート1
32		ポート2	ポート2
33		コントロールコマンド	方向制御レジスタ
34	割込コントローラ	LERL/PGRL	ISR L
35		LERH/PGRH	ISR H
36		IMRL	IMRL
37		IVR/IMRH	IMRH
38	シリアルポート	送信データ	受信データ
39		コマンド/モード設定	ステータス
3A	システム制御	SCR0	SCR0
3B		SCR1	SCR1
3C-3F	川崎製鉄に	より使用予約	